

の状態に入るので、たとえ野外条件は良好であっても発芽せず(夏~秋)、そのあと他休眠(post-dormancy)の状態になっていつでも発芽可能になったときには、すでに野外条件が生育に適しなくなるので(晩秋~冬)休眠を続けることになる。

なお、あとの論文では、数種の植物生長物質と休眠の誘導、解除について調べ、タヌキモの生活史と外的・内的条件の相互関係について一つのモデルを提出している。

(角野康郎)

## 千葉県南端の水草

斉藤吉永

千葉県東端の銚子は下手な唄い手にさえ『犬吠崎の葱』などという悪口をいって誰れにでも知られている。『犬吠崎の葱』とは、調子はづれの節なしということなのである。

ところが南端というと、とまどう人も多いらしい。館山の南の白浜町の野島崎で日本で神奈川県観音崎について明治2年に建設された洋式燈台がシンボルでもある。

海面からの高さ30m、光達距離は32.4km 燈台の南西直下には天皇、皇后両陛下の行幸啓遊ばされた記念碑が建っている。ハマナデシコやニシキミヤコグサも多いがソナレムグラ、ヒトモトススキ、イワタイゲキ、ズメノオゴケ、時にキンガヤツリ(別名ムツオレガヤツリ)を見ることができる。

この野島崎は古くは千載集に左京大夫顕輔の詠まれた『野島が崎の浜風にわがひも結いし妹が面のみ面影に見ゆ』があり、里見八犬伝の主人公『里見義実』が上陸した場所でもあり、本年のイヌドシにあやかつて観光客もふえるかも知れない。

他には源頼朝が治承4年(1180年)、石橋山の合戦に敗れて房州に逃れたときもここに立ち寄ったといわれている。その時に上陸記念に掘ったという小さい池が3つ燈台の西側の岩場に銚子、盃、酒樽と呼ばれて列んでいる。この小さい池にコガマ、ホザキノフサモ、それにミズキンバイが繁っている。

特に私はこのミズキンバイに注目していた。

千葉県では東京湾に近い船橋附近の水田に自生していたのが千葉県での北限で南に産地が多い。この野島崎のミズキンバイも夏期は池をうづめる程の繁茂をするが、冬期は水中の一部を残して枯死してしまうのである。暖い房州とはいっても雪も降るし、池が凍ることもあるの

で当然寒気に堪えられないのであろう。文献によればミズキンバイ(別名ヌマメグリ、ミズチョウジ) *Ludwigia adscendens* Hara var. *Stipulacea* Hara (アカバナ科)は多年草で日本では北海道以南、本州、四国、九州、それに隣国台湾にまで分布するとある。北海道、東北地方は相当寒いがどうして越冬しているのであろう。もっとも厚い雪にうづもれると余り気温は低下しないので、かえって千葉県あたりの寒風に吹きさらされるとこよりしのぎ易いのかも知れない。

ミズキンバイとは別に熱帯アメリカ原産といわれ、俗にウオターレタスと呼ばれている水草が野島崎の南西約6.5km程の館山市域の平砂浦の西端に近い房総フラワーライン沿線の小さい流れの中に3株野化しているのを見つけて写真を撮った。

この場所から東に約2km余りには巨大な温室群を持つ2つの施設があるが、これからの逸出とは思われないので近くの農家あたりの水槽に入れてあったものが逃走したのかも知れない。1974年12月9日のことであった。標本用にノドから手がでそうであったが、どうして冬を越すか見ものだといふと我慢してここを離れて、翌1975年2月10日に再び訪れたら影も形もなかった。念を入れて流れをさがして見たが枯死して流失してしまったのか、或いは持ち去られたのかも判らない。

その後このフラワーラインを通るたびに気をつけて見るが、現在までに野化を見ていない。ところでウオターレタスと呼ばれるサトイモ科の *Pistia stratiotes* L. とボタンウキクサの和名を持つ *Calla palustris* L. とは、全然別の植物であるのに混同されているという学者もあるが、同一とみなしている文献もある。

こうなると房州のウオターレタスの標本を作らなかつたばかりに、今では区分に役立たないのを苦にしている。

会員諸氏のウオターレタスとボタンウキクサについて御教示をお願いしたい。

(1982. 1. 10)

会費(2,000円)未納の方は  
至急、下記に振込み願います。

東京 6-81925